

テレビシアにかける橋

2007(平成19)年10月18日鑑賞<試写会・梅田ブルク7>

★★★★



監督＝ガボア・クスボ／原作＝キャサリン・バタースン『テレビシアにかける橋』（偕成社刊）／出演＝ジョシュ・ハッチャーソン／アナソフィア・ロブ／ズーイー・デシャネル／ロバート・パトリック（東北新社配給／2007年アメリカ映画／95分）

……児童文学の傑作が、すばらしいヒーローとヒロインによって、美しい映像でイキイキとスクリーン上に。頭の固くなったあなたには、「目を閉じ、心を開き、想像力をめぐらして……」というのちょっとしんどいかもしれないが、たまには……？ 物語は、楽しさ一辺倒ではなく、児童文学と思えないようなアツと驚く悲劇も……。しかし、やっぱり、想像の王国＝テレビシアは永遠に……。

空想や想像は子供の特権！

私は今58歳。2009年1月26日にはとうとう還暦を迎えることになる。しかし失いたくないのが少年の心。つまり空想や想像することができる能力だ。もっとも、いくら自分では頭が柔らかいつもりでも、年齢とともに肉体的にも精神的にもその硬直化が必然的に進んでいるはずで、少年の時に持っていたような空想力や想像力はガタ落ちとなり、現実路線ガリガリに……？

しかし考えてみれば、私だって少年の時は空想や想像の世界に羽ばたいていたもの。したがって、ある時は王様になって美しい姫と共に王宮で暮らしていたり、ある時は、たくさんの軍隊を率いて戦いに臨み、「進め！」と号令をくだしていたりしたもの……？ たとえその対象が、遠足の時に見えた森の中にある木や石、そして虫や鳥たちであったとしても……。

若きヒーローとヒロインに大拍手！

『ハリー・ポッター』の主演を務めているダニエル・ラドクリフは第1作では12歳

だったが、第5作では既に18歳となり、今やすっかり大人……？ そんな中、この映画の主人公として登場する、家庭でも学校でも疎外されており、そのため絵の世界に逃げ込んでいる男の子、ジェス・アーロンズを演ずる1992年生まれのジョシュ・ハッチャーソンはそれに代わる期待の星……？

他方、ハリウッドの女の子役としては長らくダコダ・ファニングが有名だったが、彼女ももう大人。そこで、今急浮上しているのが、すばらしいセンスを持った女の子レスリー・パークを演じた1993年生まれのアナソフィア・ロブ。プレスシートによれば、原作ではこの女の子は背が低い黒髪の女の子だったそうだが、アナソフィア・ロブはブロンドの美しい女の子。そして「いまやハリウッドで最もホットなティーン女優として注目が集まっている」と書かれているが、これは額面どおり受け止めてよさそう。この映画を通じて実現した、若きヒーローとヒロインの共演に大拍手！

原作は……？

この映画の原作は、アメリカ人の女性作家キャサリン・パターソンが1977年に出版した『テレビシアにかける橋』で、日本では1981年に翻訳されたとのこと。また、この作品は世界24カ国で出版され、500万部以上の売上を記録しているうえ、アメリカで出版された児童書の中から最も優れたものに対し年に一度贈られる1978年のニューベリー賞を受賞しているというすばらしい作品らしい。もちろん私はそんなことは知らなかったが、大人の本離れが進んでいる昨今、若い母親が子供たちに読み聞かせるすばらしい児童書にめぐり合うチャンスも少なくなっているのも無理はない。

レスリーのように多感でセンスのよい少女に育てるためには、幼児期にこんな児童書を読み聞かせるのがベスト。この映画を観た若いお母さんたちは是非、明日からそんな幼児教育の実践を……。

もっとも、少し気になるのは、チラシに「全世界が涙した児童文学の最高傑作」と書いてあること。ジェスとレスリーを主人公とする、森の中でのこんな楽しい物語なのに、一体なぜ涙することになるの……？ そう思っただけ私はずっとスクリーンを覗いていたのだが……。

なぜ2人が仲良しに……？

映画の冒頭、11歳の少年ジェスのさえない日常風景が映し出される。まず、彼の家



© Copyright 2006 Walden Media, LLC. ALL RIGHTS RESERVED.
「テラビシアにかける橋」初夏 DVD 発売予定 発売：東北新社
販売：ポニーキャニオン

は父親ジャック（ロバート・パトリック）の稼ぎが悪く貧乏。次に、彼は4人兄弟だが、男は1人だけで上2人が女で、下に小さい妹メイベル（ベイリー・マディソン）がいる。そんな状況であれば、男の子だけが大切にされてもおかしくないのだが、アーロンズ家は逆で、女の子中心主義(?)だからジェスはいつも疎外感が……? ポロポロのスニーカーを捨てられてしまったのは仕方ないとしても、お姉さんのお下がりを履けというのはあまりに屈辱的……?

他方、転校生として田舎町にやってきたレスリーは、服装からしても個性的だし、何と転校日早々、短距離走レースで早足自慢のジェスを抜いて1等賞となるお転婆ぶりを発揮。さらに、小説家の両親をもつ一人娘だけあってレスリーは早熟で多感。したがって文章の才能は抜群。作文ではすぐに先生からも一目置かれる存在となった。

そんな彼女が引っ越してきた家は何とジェスの家のすぐお隣。短距離走で負けたことで、足自慢のプライドを傷つけられたジェスにとって、最初はレスリーは生意気でイヤな女だったが、そのうち2人は急接近のうえ、かけがえのない友人に。さてそれはなぜ……?

テラビシアとは……?

ある日2人は学校の帰り道、かばんを放り出して森の中へ出かけることに。そして、

ぶら下がっていた古いロープに掴まって、「エイヤッ」と小川を渡った2人の目の前には、それまでの日常生活とは全く異なる森の風景が広がっていた。といっても、あくまでそれは想像の世界……。いくら田舎町といっても、住宅地のすぐ近くにこんなうっそうとした森があるはずはない。

プレスシートによれば、この森はニュージーランドのオークランドから北西へ1時間のところにあるコニファーの林、ウッドヒル・フォレストとのこと。しかし想像力を働かせてみれば、1本の木が兵隊となり、空を飛ぶ鳥が戦闘機になり、大木は巨人になったりするものだ。2人は木の上にあった朽ちかけていたトゥリーハウスを発見してご機嫌。ここを改装すれば、立派な探検基地になるはずだ……。

こんな風に自由奔放に想像力をかけ巡らすのはほとんどレスリーで、当初ジェスはそれについていくのがやっと。しかし、たくさんあるZARDのヒット曲の中に、『心を開いて』というタイトルの名曲があるように、「目を閉じ、心の扉を開いて、想像してごらん」というレスリーの言葉を実践していくうちに、ジェスもすっかり想像の世界のとりこに。今やこの森一帯は王国「テラビシア」となっていた。すると、もちろんジェスはテラビシアの王様、レスリーは王女サマ……？

そんなバカみたいな話の何が面白いの……？ 仮にあなたがそんな風に思うのなら、この映画を観るだけムダだから、最初からやめた方が……。

日本でもこんな楽しい授業を取り入れてみては……

ジェスとレスリーは同じクラスだが、その担任の女先生はかなり厳格。しかし、ピアノを弾いたりギターを弾いたりしながら、楽しく生徒たちに歌わせている音楽の先生エドマンズ（ズーイー・デシャネル）は優しそう。また、生徒たちの感性の豊かさを見抜く能力を持ってそう……。

そんなエドマンズ先生は、ジェスがスケッチをしているのを見て、ジェスの頭の中が絵の才能に満ちていることを発見。その結果、ジェスはエドマンズ先生にお供して、美術館見学に行くことができたのはラッキーだったが、それは、先生が急に恋人と一緒に美術館に行くという約束をスッポかされたせい……？ そんな状況下で先生がジェスのことを思い出してくれたのは、ジェスにとってラッキーだったが、どう考えてもそりゃ多少公私混同気味……？

それはともかく、このエドマンズ先生が教室で実践しているように、1つの曲をみ

んなに声を合わせて歌わせるというのは、それだけで立派な教育。日本でも、こんな楽しい授業を取り入れてみては……。

児童文学にもこんなシビアな面が……

一足先に映画化されたC・S・ルイス原作の『ナルニア国物語』は、4人兄弟がナルニア国で冒険の旅をくり広げるもの。それが最終的にどんな結末になるのかは知らないが、私は勝手にハッピーエンドになるものと決めつけている。

この『テラビシアにかける橋』についても同じような気持で、とにかく童心に戻り楽しく鑑賞しようという気持で観ていたのだが、ジェスが美術館から自宅に戻ってみると家の中はえらく沈痛な雰囲気。そして、父親と母親からは「一体どこへ行ってたんだ！ 心配していたんだぞ！ 死んだのかと思った！」とすごい剣幕で迫られたからジェスはビックリ。だって、ジェスは出かける前に、母親に対してきっちりと「先生と一緒に美術館へ行ってくる」と説明していたはずだから……。こりゃ一体何の騒ぎ……？ まさか……？

児童文学の世界にも、こんなシビアな世界があることを知ってビックリ……。

テラビシアは永遠に……？

この映画の評論は書きにくい。だって、これからこの映画を鑑賞しようという人たちに対して、ここで突然起こった悲劇をベラベラ喋るわけにはいかないから。もちろん「ネタばれ注意！」と断ったうえで詳しく評論することはできるのだが、この映画の評論に関してはそれはやめておこう。そこで最後に私が言いたいことは、想像の王国テラビシアは永遠だということ……。

ジェスは、いつも自分にまわりついてきた小さい妹メイベルのことをうっとうしく思っていた。そのためテラビシアについてもジェスとレスリーの2人だけの秘密にしていたが、幼い妹が、いつも兄が出かけている森に興味を示していたのは当然……。

ここで、あなたには、この映画のタイトルが『テラビシアにかける橋』とされていることに想像力をめぐらしていただきたいもの。そして私からは、この幼い妹メイベルがキーウーマンになるとだけ書いておこう。そうすれば、あなたが目を閉じ、心を開いて、想像力をめぐらせれば、きっとテラビシアが永遠だということが見えてくるはず……。

2007(平成19)年10月23日記